



★★★★

**サブスタンス
(THE SUBSTANCE)**

2024年／アメリカ映画
配給：ギャガ／142分

2025（令和7）年5月17日鑑賞 TOHOシネマズ梅田

Data

2025-47

監督・脚本：コラリー・ファルジャ
出演：デミ・ムーア／マーガレット・クアリー／デニス・ケイド

みどころ

テレビ上では、連日連夜、健康食品や健康器具・健康サプリメントのコマーシャルが流れているが、“サブスタンス”とは一体ナニ？本作冒頭、卵が2つに分裂する姿が映し出され、これと同じように、ある注射を打つとDNAが分裂し、背中を破って“より完璧な自分”が登場すると・・・？

『G.I. ジェーン』(97年)で見た女優デミ・ムーアは、本来ニコール・キッドマンと同じ“ハリウッド・ビューティ”だが、『チャーリーズ・エンジェル フルスロットル』(03年)では“悪役”に挑戦！そして本作では、「1週間交代」のルールを破っていく“もう一人の完璧な自分”が、より美しく、よりゴージャスになるにつれて、何ともむごたらしい姿に！

本作は、第97回アカデミー賞で主演女優賞を逃したものの、メイクアップ＆ヘアスタイリング賞を受賞！本作のクライマックスは“阿鼻叫喚の大団円”に至るが、そこに見る、恐るべきメイクアップ技術とそれを熱演するデミ・ムーアの女優魂に注目！もっとも、怖がりの私はほとんど目を覆ってしまったが、ホラー好きのあなたなら、「そこまでやるか！」と誰しも思うであろう、本作の徹底した“阿鼻叫喚の大団円”を、しっかり確認をしてもらいたい。

■□■デミ・ムーア主演の超話題作がやっと日本で公開！■□■

ハリウッドを代表する女優の一人であるデミ・ムーアは『ゴースト ニューヨークの幻』(90年)で有名になったが、私は同作は未鑑賞。ハリウッド女優デミ・ムーアの名前とその肉体美を私にはっきり印象付けたのは『G.I. ジェーン』(97年)だった。同作で、志願者の60%は脱落すると言われる、最難関のアメリカ海軍特殊部隊の訓練プログラムに挑むため、髪を刈って丸坊主に変え、男たちと一緒に起きるをともにし、“女”を捨てて苛酷な訓練に

励む主人公を演じる姿は、そりやすごいものだった。

そんな女優デミ・ムーアの印象をさらに強く印象付けたのは、キャメロン・ディアス、ドリュー・バリモア、ルーシー・リューという3人の美人女優を中心とした『チャーリーズ・エンジェル』シリーズの『チャーリーズ・エンジェル フルスロットル』(03年) (『シネマ3』274頁) に、何と「4人目の美女」ながら「敵役」として登場したことだ。考えようによつては、デミ・ムーアはニコール・キッドマンと同じようなハリウッド・ビューティだ。そんな彼女が同作に悪役として登場する決心をしたのは40歳過ぎの頃だが、時の経つのは早いもの。同作から既に20年以上が経過した今、ハリウッド女優デミ・ムーアがフランス人の女性監督コラリー・ファルジャによる「女性の体をテーマにした」超問題作に出演！

本作は第97回アカデミー賞で、作品賞、主演女優賞、監督賞、脚本賞、マイクアップ&ヘアスタイリング賞にノミネートされたものの、マイクアップ&ヘアスタイリング賞のみの受賞にとどまった。しかし、第77回カンヌ国際映画祭では脚本賞を、第82回ゴールデングローブ賞では主演女優賞を受賞した超問題作だから、こりや必見！そう考えていた本作が、やっと5/17、日本でも公開された。

■□■「サブスタンス」とは？再生医療には要注意！■□■

くだらないテレビ番組ばかりが増えている昨今、下手なTVドラマを見るより、ジャパンネットたかたや夢グープ等のTVコマーシャルを観ている方が楽しいこともある。もつとも、そこで連日連夜報じられている健康食品や健康器具、健康サプリメント等はどこまで信用できるの？そんな疑問がある。

突然プロデューサーのハーヴェイ（デニス・クエイド）からレギュラーパン組からの降板を言い渡された、今や50歳を超えたエリザベス・スパークル（デミ・ムーア）が、ある時にしたのは、「人生を変えた」というメモで包まれたUSB。そして、それは、「1回の注射で新たな細胞分裂が始まり、より若く美しく完璧なもう一人のあなたを作り出す」という再生医療“サブスタンス”的広告映像だった。エリザベスは1度はそれをゴミ箱に捨てたものの、USBに記された番号に電話をかけると、翌日には503と書かれたカードキーが送られてくることに。そして、導かれるままに、あるビル内のロッカールームに入り、そのカードキーで、503のロッカーを開けると、段ボール箱が！しかし、ホントにそれを開けていいの？再生医療には要注意だが・・・。

■□■完璧なもう一人のあなたは？『ミッキー17』との異同！■□■

本作のパンフレットには、「『サブスタンス』は女性の体をテーマにした映画です。女性のからだは、公の場で好奇の目、幻想、批判に晒されてきました。」から始まるコラリー・ファルジャ監督のメッセージ「A message from DIRECTOR CORALIE FARGEAT」が左1ページに掲載され、その右1ページにサブスタンスのUSBとデミ・ムーアの大きな顔写真が載っている。ハーヴェイから、「降板」を宣告されたエリザベスが、「1回の注射で新

たな細胞分裂が始まり、より若く美しく完璧なもう一人のあなたを作り出す」というサブスタンスの宣伝文句にまんまと乗せられてしまったのは一体なぜ?それが最初の論点だが、そのストーリーにいかに説得力を持たせるかがコラリー・ファルジャ監督の最初の腕を見せ所だ。

私はポン・ジュノ監督の最新作『ミッキー17』(25年)をあまり高く評価しなかった。それは「SFもの」たる同作では、「使い捨て人間」「記憶移植」「人体プリンティング(人体複製)」「人格バックアップ」等々の“キーワード”があまりにも難解過ぎたためだ。それと同じように、本作でも、DNA分裂し、エリザベスの背中を破って現れた「より完璧な自分」であるスー(マーガレット・クアリー)と母体のエリザベスは、「1週間ごとに入れ替わらなければならない」という絶対的なルールがあったことがミソ!本作ではそれをいかなる映像でいかに見せるかが大きなポイントだが、その出来はアカデミー賞のメイクアップ&ヘアスタイリング賞を受賞したことから明らかだ。

他方、本作ではスーの姿を見たハーヴェイが「何でゴージャスでかわいい」と一目で気に入り、スーをメインとした番組を始めると約束するまでの、「サブスタンス」によるスーの誕生までの説明にかなりの時間を要するのが少し難点だ。

『ミッキー17』では、マルティプル(重複存在)は厳禁とされているにもかかわらず、「ミッキー17が死んでしまった」との“誤解”からミッキー18が誕生し、マルティブル状態が生まれた中盤から、あっと驚く奇想天外な物語に移行していった。それと同じように、本作でも、当初はエリザベスが定期的に取りに行く503のロッカーに入った「ダンボール」から、2人とも定期的に栄養剤を摂り、ルール通り1週間ごとに1人の人間に2人の人格をシェアしていたが、スタートダムを駆け上がっていくスーが次第に「7



© 2024 UNIVERSAL STUDIOS

日間で交代】

のルールを破り始めるところから、奇想天外なものすごいストーリーが展開していくことになるので、それに注目!

■□■母体の劣化に注目！だがあなたは一つ！さあどうする？■□■

コラリー・ファルジャ監督の頭の中にはずっと「本作のテーマ」すなわち、「私たちの価値が外見で評価されるという考え方や、常に周囲の期待に応えなければならないというプレッシャー」があったそうだが、本作の脚本を書き始めたのは40歳を迎えた時。それは、その当時、心の中に津波のように、「私はもうおしまい、何の価値もない、誰にも見向きされず、興味を持たれなくなる」という激しく衝撃的な感情が押し寄せてきたためだ。なるほど、なるほど。その結果、いわゆる“ルッキズム”を風刺する“ボディホラー”たる本作が生まれた上、“本格的なジャンル映画”を通して、同監督の中にあるむき出しの激しい感情を特殊効果を駆使しながらスクリーン上に爆発させることになったわけだ。

私は小学生の頃に見た「タランチュラ（巨大クモ）」の映画が怖くて、半分目を覆いながら観ていたことを今でもよく覚えているが、正直に告白すれば、それは本作も同じ。つまり、本作の映像に見る特殊効果は当初、エリザベスの背中が割れて“異物”が流れ出るシークエンスで顕著だったが、それは本作の冒頭に1個の卵の中に差し込まれたスポイドで卵の中の液を抜き取ると、そこに別の卵が生まれてくる風景の延長線程度のものだったから、違和感も怖さも少なかった。しかし、スーが「1週間ルール」を破り始めたことによってエリザベスの栄養バランスが崩れ、肉体の劣化が現れ始めると、さあ大変。本来ハリウッド・ビューティであるはずのデミ・ムーア（エリザベス）の左手が急に老婆のような手になってきたから、思わずゾオ・・・。

そんな「母体の劣化ぶり」に驚きかつ恐れおののいたエリザベスは、直ちに電話したが、電話口から冷たく「エリザベスもスーも、あなたは一つ！」と言われると・・・？さあ、エリザベスはどうするの？



© 2024 UNIVERSAL STUDIOS

■口■パンフ収録の3本のコラムに注目！こりゃ熟読！■口■

本作のパンフには次の3本のコラムが収録されている。すなわち、

- ① 川口ミリ氏（ライター・編集）の『サブスタンス』は家父長制へのパンクでキャンピーなカウンターである！」
- ② 斎藤博昭氏（映画ジャーナリスト）の「果敢なチャレンジでの復活劇。ハリウッドの伝統を見事に体現したデミ・ムーア。」
- ③ 香山リカ氏（精神科医）の「老いの心理は、心の表面と奥をうまく統合させていくプロセス。」

しかして、③のいかにも精神科医らしいコラムにおける、「もちろん、『サブスタンス』は現時点では架空の医療技術だが、美容医療やアンチエイジング医療が花盛りのいま、エリザベスの葛藤や選択は決して他人事ではない」との警鐘（？）は説得力がある。したがって、「ユングの言う『心の統合』を手に入れるのは、私たちにとってますます難しくなりつつある。それでも、『もっと若く』『もっと明るく元気に』という呪縛から解き放たれ、ありのままの自分を受け入れ、内面を見つめる努力を放棄してはいけないと思う。私たちの分身であるエリザベスが、そのことを教えてくれるのだ。」との誰にでも納得できる当然の結論は、なるほど、なるほど。

また、②は、『G.I ジェーン』（97年）と『チャーリーズ・エンジェル フルスロットル』（03年）の両作を観た上で本作を鑑賞した私には、とりわけ興味深かった。

■口■見るに絶えない阿鼻叫喚の大団円は13万リの血糊から■口■

他方、チラシに「かおるいが暴走して阿鼻叫喚」の見出しが躍る本作のラスト約30分間のクライマックスにおける“阿鼻叫喚の大団円”についての何とも強烈なコラムが上記①だ。その冒頭は「21世紀最高のボディホラー作家が、いずれもフランスの女性監督なのは偶然だろうか？『TITANE／チタン』（21）のジュリア・デュクルノー、そして『サブスタンス』のコラリー・ファルジャだ。」だから、これを理解するのはかなり難しい。しかし、中ほどに書かれている「エリザベスもスーも、攻撃はすべてお互い一すなわち自分自身に向ける。ショービジネス界で生き残るという共通目的を前に、その戦いは無意味だし破滅的だ。なぜなら『あなたは一つ』なのだから。それでもなお続くバトルと、その結果としてのグロテスクな身体の変容は、現実の自分と理想の自分とのギャップに悩む現代人が陥りがちな、自己嫌悪のメカニズムを鋭く映し出す。エリザベスやスーが抱える『このままの自分じゃダメだ』という切迫感自体は、誰もが共感しうる普遍的な感情かもしれない。」の主張（？）には、なるほど、なるほど。

さらに、本作にみる「注射や瞳孔の超接写」「海老をむさぼる口元」「身体が崩れてゆく恐怖を追体験」等についての特殊メイクアップのテクニックは、私にはわからないものの、本作のど肝を抜く強烈な映像と、同コラムの筆者特有の表現を読めば、これも、なるほど、なるほど。そして、同コラムの最後には、『キャリー』（76）を彷彿とさせる阿鼻叫喚の大

団円は、13万リットル超の血糊を使って撮影したそう。可能な限りCGIを避け、職的な特殊効果を駆使した理由を『これは骨肉についての、女性の身体についての映画だから』と監督は一貫して語る。』と書かれているので、これにも注目！そもそも私は、“阿鼻叫喚”と“大団円”は矛盾する概念だと思うのだが、本作ではそれが合体する、魔化不思議かつ超恐ろしいシークエンスが続いている。他方、「タランチュラ」の映画でさえ半分目を覆っていた怖がりの私は、本作のクライマックスである“阿鼻叫喚の大団円”については、ほとんどの目を覆っていたので、正確な映像情報を提供するのは到底無理だ。しかして、コラム①のラストは、「大団円から、『永遠（とわ）に美しく…』（92）にも似たシニカルなオチまでの流れは、まさにルッキズムを煽る家父長制社会への、パンクでキャンピーなカウンターである。』と続くので、なるほど、なるほど。

もっとも、それに続く同コラムのラストは、「その痛快さはきっと、パリの眼鏡っ子だった監督自身がジャンル映画の数々に見出していいた解放感に通じているはずだ。』と書かれているが、私はこれには少し異論がある。さて、これについてのあなたのご意見は？



『サブスタンス』

2025年11月12日発売

Blu-ray:¥5,500（税込） DVD:¥4,400（税込）

発売・販売元:ギャガ

© 2024 UNIVERSAL STUDIOS

2025（令和7）年5月22日記